

## ヒマラヤに咲く小さな花

よしおかだいすけ  
～ ヒマラヤに学校をつくった吉岡大祐 ～



吉岡大祐さん

1976年、松山市に生まれた吉岡大祐さんは、高校生のころ、担任の先生から「社会の役に立つ人になりなさい」と言われたことをきっかけに、「自分はどんな仕事につけば社会の役に立つ人になれるだろう」と考えるようになりました。

中学生のころ、習っていた柔道のけいこをしていた時、仲間が腰を悪くしていたので付き添いをする事になり、行ったところが鍼灸院しんきゅういんでした。そこでは、鍼はり一本で腰や膝ひざを治療ちりょうしていました。その治療の様子を思いだした吉岡さんは、「鍼灸師しんきゅうし」になろうと決意しました。

1998年、父の友人であるネパール人のすすめでネパールへ行きました。ネパールという国は、世界一高いエベレストのあるヒマラヤ山脈が大部分を占める国で平野が少なく、とても貧しい小さな国です。そして、ネパールにはカースト制度という身分の差別が残っていました。たとえば、身分の高い家に生まれると収入の多い仕事につくことができ、身分の低い家に生まれると収入の少ない仕事にしかつせず、貧しい生活を一生続けることとなります。

吉岡さんはネパールの大学に入り、大学の勉強をしながら無料で鍼灸治療を始めました。すると、次々と治療を受ける人が増えてきました。ある日、患者かんじゃの一人から、「山の上の村に友だちがいて、どうしてもここまで来ることができないから行ってもらえないか」と言われて、その村に行きました。この

村は非常に遠い村で、何時間かけてもなかなか着きません。途中で休んでいたら、一人のおばあさんが大きな荷物を背負ってきたのです。そのおばあさんはずっと膝をさすっていました。「膝が痛むのですか」と声をかけると、「ずっと痛いんよ」と言うので、そのおばあ



おばあさんと出会って診てあげる吉岡さん

さんの家の軒先<sup>のきさき</sup>で治療をしました。治療が終わって、おばあさんの顔を見ると、おばあさんは涙を流しながら「生まれてきてよかった」とささやきました。おばあさんはカースト制度で非常に低い身分の生まれでした。そのため、これまで村人や社会からやさしくしてもらったことがなく、生まれて初めて人にやさしくしてもらったことがうれしくて、涙を流したのです。

吉岡さんは、同じ人間に生まれながら、人のやさしさにふれることなく一生を終える人がこのネパールにいることを知り、活動を続ける決心をしました。

その後、知人のお医者さんに誘われて西ネパールの医療<sup>いりょう</sup>キャンプに参加することになりました。首都<sup>しゅと</sup>のカトマンズから20時間バスに乗り、最後のバス停から4日間歩いてたどり着くようなへき地の村でした。

医療キャンプが開かれると、近くの村からたくさんの患者が集まってきました。特におどろいたのは、下痢<sup>げり</sup>やおう吐<sup>と</sup>など感染症<sup>かんせんしょう</sup>の子どもたちが多くことでした。お医者さんにそのわけを聞くと、「子どもたちは学校に行っていないので、感染症から自分の身を守る方法を知らないのです」ということでした。

そのキャンプ中、治療をしている部屋に11～12歳ぐらいの少年が部屋をのぞきにきました。吉岡さんが、「中に入ったら」と言うと、その少年は、

「自分の名前を書きたいから字を教えて」「ネパール語を教えて」と言うのです。自分の名前も書けない子がいることをはじめて知りました。「ゴビンダ」と少年の名前を紙に書いて渡すと、少年は一生懸命練習してきました。次の日、「お母さんの名前を教えて」「弟や妹の名前も教えて」……少年のあまりの熱心さに心打たれた吉岡さんは少年の家を訪ねました。ゴビンダの父親はインドに出稼ぎ<sup>でかせ</sup>に行った時の事故で体がまひして動きません。母親は目が見えません。そのためゴビンダがレンガ工場や建設現場などで働いて一家を支えていたのです。

吉岡さんは、ゴビンダのように貧しくて学校へ行けない子どもたちのために何とか応援ができないか心から考えるようになりました。

そして、ネパールの仲間たちに声をかけ、持ち寄った基金を元に貧しい母子家庭の子ども12人が学校に行けるよう活動を始めました。そして、それらの活動をさらにすすめるために無償<sup>むしょう</sup>で学べる学校をつくることを決意しました。

ちょうどそのころ、冒険家で有名な三浦雄一郎さんが、クラーク記念国際高校の生徒たちといっしょにヒマラヤにやって来ました。そして、吉岡さんから「ネパールの貧しい子どもたちのための学校をつくりたい」という熱い思いを聞いた三浦さんは、「ぼくは世界一高いエベレストを目指すから、世界一おもしろくて夢のある学校を一緒につくろう」と声をかけてもらいました。



開設されたヒマラヤ小学校

さっそく、三浦さんは生徒たちといっしょになって、「チャリティーネパール」

と名付けた学校建設を目的とした募金<sup>ぼきん</sup>活動を広げていきました。

そして、2004年、カトマンズの南にあるブンガマティ村に「ヒマラヤ小学校」を開校することができました。



ヒマラヤ小学校の子どもたち

開校したときは、3クラス68人でしたが、十分な学用品もなく、教室はベンチが2つあるだけで、子どもたちはむしろに座って学ぶ状況でした。給食も月に一度だけでした。それでも、字が読める、字が書ける喜びは子どもたちだけでなく、親たちにとってもかけがえの

ない喜びでした。

現在は、学校の設備も次第に充実し、幼稚園3クラス、小学校1年生から5年生まで8クラス100人くらいの子どもたちが勉強にはげんでいます。

このように吉岡さんは、鍼灸師として医療の面で活動するとともに、ネパールの恵まれない子どもたちのためヒマラヤ小学校をつくりました。

#### 参考にさせていただいた本

- 「ヒマラヤに咲く小さな花」—子ども達からのメッセージ—  
ヒマラヤ青少年育英会 吉岡大祐  
第58回青少年赤十字研究会講演集より
- ヒマラヤに学校をつくる 吉岡大祐著 旬報社  
～カネなしコネなしの僕と見捨てられた子どもたちの挑戦～  
第65回読書感想文全国コンクール高学年部門課題図書